

【今週の注目疾患】

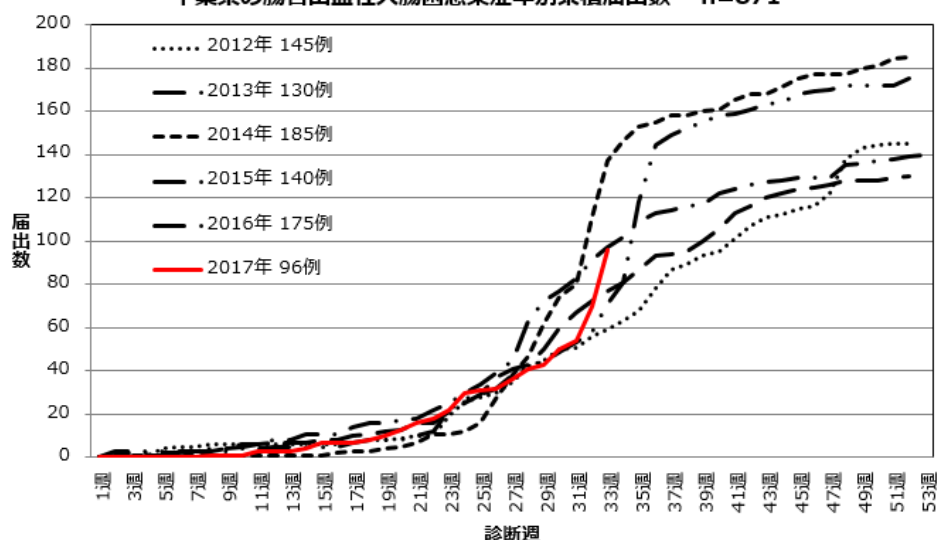
【腸管出血性大腸菌感染症】

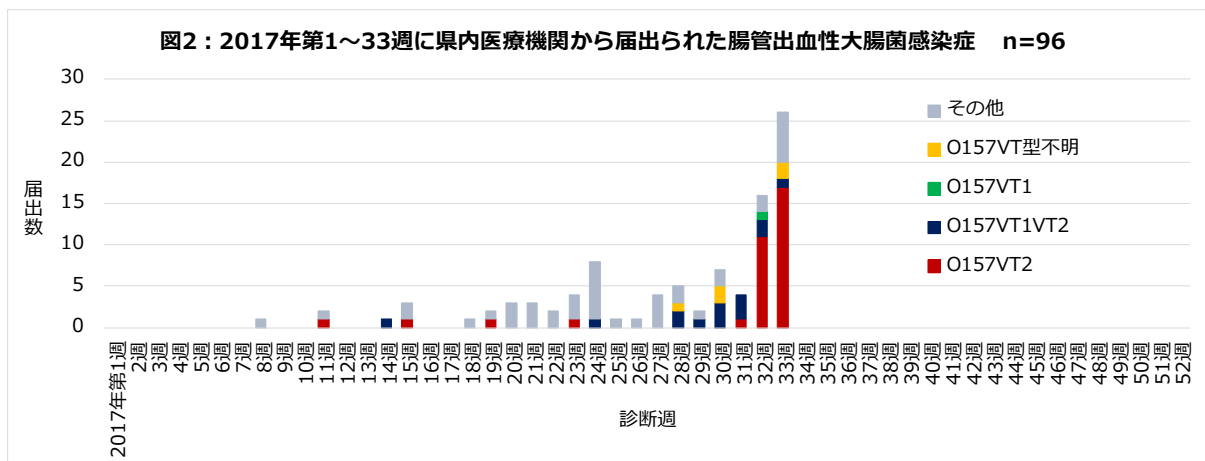
2017年第33週に県内医療機関から26例の腸管出血性大腸菌感染症が診断・届出られた。第32週にも16例が届出られており、8月に入り腸管出血性大腸菌感染症の届出が急増し(図1)、3例のHUS発症例(届出時点)も認めている。2017年第32週以降は、O157 VT2による症例が67%(28例)を占めている。県内におけるO157 VT2による腸管出血性大腸菌感染症の届出は、第31週に1例の届出を認めるまで、第23週以降、約2カ月間届出がなかったが、2017年第32週に11例、33週に17例のO157 VT2による腸管出血性大腸菌感染症の届出があった(図2)。第31週以降に届出られた29例のO157 VT2による症例をまとめると、患者24例、無症状病原体保有者5例となっており、無症状病原体保有者は接触者調査によって探知された症例である。性別では男性13例、女性16例、年齢群別では10歳未満1例、10代7例、20代6例、30代5例、40代3例、50代3例、60歳代以上4例となっており、特定の性・年齢群に集積は見られない。保健所別では松戸保健所9例、柏市保健所7例、千葉市保健所4例、船橋市保健所4例、印旛保健所2例、野田保健所、習志野保健所、市原保健所それぞれ1例となっている。なお、県外においても第30週以降、南関東の東京都、神奈川県と埼玉県からO157 VT2による腸管出血性大腸菌感染症の届出が認められている。詳しくは国立感染症研究所や各自治体の地方感染症情報センターのホームページを参照されたい。

腸管出血性大腸菌感染症の予防には、平時より手洗いの励行、肉類は十分に加熱することや、野菜類は十分に洗浄し、調理時には交差汚染に注意が必要である。また、腸管出血性大腸菌感染症は糞口感染によるヒトヒト感染事例も多い。子供や高齢者の健康状態にも注意を払い、下痢などの体調不良時にはプールや共同浴場などは避け、周囲へ感染を広げないことも重要である。

図1：2012年～2017年第33週

千葉県の腸管出血性大腸菌感染症年別累積届出数 n=871





国立感染症研究所 EHEC の速報グラフ

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/ehec/550-idsc/7012-ehec-sokuhou-2017.html>